

「ヤモリを踏んだ日」

—初稿—

2025/4/4

雨森 れに

〈人物表〉

吉住 よしずみ
みき

(22) 大学生

吉住 かなえ
佳苗

(51) みきの母親。6年前に夫と死別

田中 あきひろ
晃

(34) 佳苗の恋人

吉住 たけひこ
武彦

(50) みきの父親。今年七回忌を迎える。

1. 吉住家・外観（夜）

鬱蒼とした庭を持つ、一軒家。

玄関はガラスの引き戸で、室内の明かりが透けて見えている。

門をくぐり、玄関に向かう吉住みき（22）。

玄関前で立ち止まる。

引き戸の足元にヤモリが張り付いている。

足で脅かすようにして、追い払う。

みきは家の中へ。

2. 吉住家・居間（夜）

台所と繋がる、狭めの和室。端には仏壇があり、吉住武彦（50）の遺影が飾られている。

みきは仏壇の前に行き、手を合わせる。

みき 「お父さん、ただいま」

吉住香苗（51）が台所から顔を出す。

佳苗 「おかえり。すぐ夕飯できるよ」

みき 「ありがとう。あ、お父さんの、私やろうか」

佳苗 「お願いしていい？」

みきが台所に向かう。

3. 吉住家・台所（夜）

一般的な独立キッチン。奥にコンロがあり、佳苗が炒め物をしている。

みきは食器棚からお供え用の茶碗を取り出し、ご飯をよそう。表情は優しい。

佳苗、みきの様子をちらりと見る。

それから食器棚の男物の茶碗を見て、悲しそうに目を伏せる。

4. 吉住家・居間（夜）

みきが仏壇に茶碗を供える。

おりんを鳴らし、手を合わせる。

佳苗 「準備できたよ」

みき 「はーい」

ちゃぶ台の上に料理が並んでいる。

みきと佳苗が席に着き、「いただきます」と声を合
わせる。

みきが食べ始める。

香苗はみきの様子を見ているだけ。

みき 「ん、どうしたの」

佳苗 「みき、あのね。相談したいことがあって」

みき 「あ、お父さんの七回忌？ もうすぐじゃんね」

佳苗、気まずそうに視線を逸らす。

佳苗 「それも、そうなんだけどね」

みき 「なにになに。なんかあった？ 珍しいじゃん」

佳苗 「ずっと言わなきゃなって思ってた、隠してたわけじゃな
いの。それは本当」

みき 「だから、なに？」

佳苗はさがるような目でみきを見る。

佳苗 「お母さん、再婚しようかなって思ってるの」

みき 「え……」

みきが動きを止める。理解できないという様子。

佳苗が慌てる。

佳苗 「すぐにじゃないよ。みきが大学卒業するまで待つつもり」

みきは固まったままで返事をしない。

佳苗 「そ、それでね。明日休みでしょ？ 会ってくれないかな」

みき 「（かすれた声で）もしかして、ここに来るの？」

佳苗 「うん。挨拶だけだからすぐ帰るよ」

みき 「なんで？ ここ、お父さんの家だよ」

佳苗 「それは……」

みき、視線を仏壇へ。

みき 「てか、お父さんの前でそんな話する？」

佳苗 「みき……」

みき 「そもそも、お母さんはお父さんが好きだったんじゃない
の？ なんて次の人にいけるの？」

みきが立ち上がり、佳苗を見下ろす。

みき 「信じらんない」

5. 吉住家・みきの自室（夜）

小さな洋室。机の横にすりガラスの窓がある。
みきが机に伏せている。
顔を上げて、机の上にある写真立てを見る。
小学生の頃のみきと両親が笑っている。
みき、写真立てを引き出しにしまう。
窓にヤモリの影があるのに気づき、ガラスを強く叩いて追い払う。

6. 吉住家・居間（朝）

台所から菜刻む音が聞こえる。
みきは佳苗に気付かれないように、仏壇へ。
しかし、すぐに佳苗に呼び止められる。

佳苗 「おはよう」

佳苗は泣き腫らした目をしている。

佳苗 「昨日はごめんね。ちょっと急すぎたよね」

みき 「ねえ、私だけなの？」

佳苗 「え？」

みき 「三人でいた時間を大切にしてるの」

佳苗 「それは私も大切にしてる。けど」

佳苗、絞り出すような声で、

佳苗 「もう、ひとりは嫌なのよ」

と、俯く。

みきはショックを受けた様子。

みき 「私がいるじゃん」

佳苗 「いつかは出ていくでしょ。ひとりで、この家で、思い出と暮らせていうの？」

みき、仏壇を見て、佳苗に視線を戻す。

佳苗の肩が震えている。

佳苗 「わたしが幸せになるのって、そんなに悪いこと？」

みき 「そんなこと言っていない」

佳苗が首を振る。

佳苗 「こんなおばさんが結婚なんて気持ち悪いって」

みき 「だから、言っていない！」

みき、畳をドンと踏みつける。

みき 「もう好きにすれば！」

勢いよく居間を出ていく。

玄関の引き戸の音。

佳苗は鼻をすすり、目元を拭う。

そしてスマホを取り出し、操作する。

7.

吉住家・庭（朝）

雑草が多く、低木の植え込みもあるが手入れされていない。

みきは植え込みの陰でしゃがみこんでいる。

みきからため息が漏れる。

門が開く音がし、顔をあげる。

田中晃（34）が玄関に向かって歩いていく。

佳苗が出てきて、田中に少し駆け寄り、手を握る。

みき、驚いて立ち上がる。

佳苗 「みき……？ 出かけたんじゃない？」

田中から離れる佳苗。

真新しい涙が流れている。

みき 「ホント、信じらんない」

田中 「みきさん、違うんです。僕が無理に会いに来たんです。

佳苗さんがひとりだと思って……」

みきは憎しみのこもった眼で睨む。

みき 「出て行って」

佳苗 「みき、話せばわかるから」

みき 「お母さんは勝手だよ。さっき話して、すぐこれ？」

みきが田中を指差す。

みき 「しかもこんな若い人。結婚詐欺？ それとも遺産狙い？」

田中が眉根を寄せる。

佳苗は怒りを露わにする。

佳苗 「そんなわけない！ そんなことできるような人じゃない」

みき 「人を騙す顔だよ。こーゆー爬虫類顔の男は。お父さんと

真逆じゃん」

佳苗 「いいかげんにしなさい！」

田中 「いいよ、佳苗さん」

田中、みきに向き直る。

田中 「みきさん。佳苗さんは、あなたとお父さんの話ばかりしますよ。僕がヤキモチ焼くぐらいに」

田中がみきに頭を下げる。

田中 「今度また改めさせてください」

田中が去っていく。

佳苗はみきと田中を見比べて、田中の後を追う。

みきは佳苗を視線で追う。

佳苗が出ていき、門が開かれたままになる。

みきは無表情で佇んでいる。

地域の、昼を知らせる音楽が鳴る。

みき、動けるのを思い出したように、ゆっくりと玄関へ向かう。

引き戸の前にヤモリ。

思いつきり踏みつける。

門を振り返る。

その顔は憎悪に歪んでいる。

8.

吉住家・みきの自室（夕）

すりガラスから夕暮れの気配がする。

写真立てが机の上に戻されている。

中の写真は、佳苗の部分だけ破られている。

おわり